

# 介護現場の「困った利用者」にどう向き合うか?

## 「発達障害」を中心に (たぶねシリーズ1回目)

精神保健福祉士事務所カナナ 代表 木下秀美  
(認定精神保健福祉士、  
自閉症スペクトラム支援士:STANDARD)

説明しても介かってくれない、  
約束を破る、その日の気分が対応が変わる、  
どう見てもワガママなだけ…。こうした言動や対応に、支援者は困るものです。

冒頭から辛口になってしまっていますが、「困った人…」と誤ってしまう時点で、「そう思っているのか?」と考えて欲しいと思います。

視点を変えると(リフレーミングすると)、「(幼児期～学童期の)子どもと同じかも?」と思いませんか?

### ○女生社会に向かう時代と介護

政府官邸も、内閣府も、文部科学省も、もちろん厚生労働省も、国民一人ひとりが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくとともに、年齢や障害の有無などにかかわらず、安心して暮らせる「女生社会」の実現を強調しています。女生社会は、誰もが社会にあたりまえに参加し、能力や状態に応じて役割を担い、相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会であり、それが実現できていないので重要な課題として取り組んでいこう、とするものです(「女生社会」でネット検索すると上位にヒットします)。

しかし、現実(制度・サービスや現場の実態)との乖離はクッキリ見えてしまったり、何かのマニピュルがあるわけでもないのに、「何すればいいの?」「どうせ無理だよ」となってしまいますね。

みなさんの子や孫、みなさんご自身の老後を考える時、現状から、少しでも女生社会に近づいていて欲しいと思いませんか?

要介護状態の高齢者は、これまでの人生を、これまでの時代を切り開き、築き、今日につないでくれた方々です。年を重ね、様々な疾患にも罹患し、目・耳など感覚器官や脳の認知機能にも衰えや障害が生じている病者であり障害者である人がほとんど、と言っても間違いではないでしょう(受診し診断を受けているか否かの違い)。

そして何よりも、各々が、一人一人の権利を有する人である、ということが大切です。

人生の終盤、自らの老化や衰えを受け入れつつ(これ自体が困難な課題)、現実の身体機能の変化を感じつつ、家族などに「迷惑を(できるだけ)かけたくない」と思い、必要とする医療・福祉・介護などの公的な支援を甘んじて受けながら生きていく選択をされた方々。できれば、まだ若かった頃に描いたであろう「自らの老後」生活をあきらめたくないはず。

私たち支援者が立つべき位置(目線)は、こうした願い(ニーズ)を、どうすれば一踏みに実現できるか、近づけることができるか、ということではないでしょうか。 つづく

# “高齢者の住まい”アウカイト

## 第9回 「認知症高齢者と住環境」パートⅢ

今回は「認知症高齢者と住環境」の最後となります。これまで2事例を紹介してきましたが、今回は「住まい」や「施設」における認知症高齢者が暮らす上で、様々な事例を通して得た教訓から留意すべき点を紹介したいと思います。

### (1)「徘徊」への対応策

#### ①「住まい」や「施設及び居住ユニット」の玄関

夕暮れ時や就寝時には認知症高齢者が「徘徊」しないように戸に鍵を掛けるのが通常であるが、「鍵」を掛ける行為は、認知症の人の立場に立って考えれば「家」(自宅の場合は昔の家)に帰りたいのに帰れないので極度のストレスを覚え、パニック状態にさえ陥ることになります。そのことは益々認知症の進行・悪化をもたらします。

そのストレスを感じさせない方法が二つあります。

- 1、就寝時間の鍵掛けはやむを得ないが、夕暮れ時は鍵を掛けず認知症高齢者が出るのを受容し、スタッフ(自宅では家族)が後を付けて見守る。やがて、本人は家に帰ることすら忘れてしまい、その期にスタッフが「家に帰りましょう」と声を掛け施設に連れて帰る方法。
- 2、玄関の戸に鍵を掛け、玄関の戸を隠すようにカーテンを敷く。多くの認知症高齢者はカーテンを敷くことにより「玄関」であることが認知できずUターンして元へ戻るケースが多い。尚、鍵は通常の高さ(FL+80~90cm)ともう一つ高い位置(FL+170cm)に付けるのが良い。認知症高齢者は2つあるのを認知できない人も多い。また、健常者は2つの鍵を両手で開けることができるが認知症の人はそれができない人が多い。

#### ②「住まい」の和室のふすまの留意すべき点

認知症高齢者にストレスを与えないことが認知症の進行・悪化を防ぐ重要なことであることは述べましたが、そのことを「住まい」の和室についても留意する点があります。和室の入り口のふすまとその横に押入れがあり、その押入れの建具をふすまとしている場合に、入り口と押入れのふすま紙を同じ模様とした場合、認知症の高齢者はどちらが入り口か判別できずにパニックに陥りることが多々あります。できれば、模様を変えることが必要です。

#### ③自分の居場所(部屋)が認知できる対策

第6回「高齢者と生活環境の中の“色”」で紹介しました高齢者が認知症になっても最後まで認知できるのは5感のうち「視覚」の“色覚”であり、その色も赤が最も反応がよかったというストックホルム大学での研究成果ですが、認知症の人の部屋には、時折、赤いバラの花を生ける。また、カーテンやテーブルクロスには一部分(ラインや丸点)だけ赤を散りばめたデザインのものを使用するのが良いでしょう。

そのことは、認知症の進行を和らげると共に、自分の居場所を認知する上で効果があります。 (つづく)